

豊議議第600号
令和7年(2025年)12月19日

豊中市議会議長
井本博一様

文教常任委員会

委員長	中島紳一
副委員長	北之坊晋次
委員	和田愛美
委員	吉田正弘
委員	白岩正三
委員	中川隆弘
委員	弘瀬源悟

文教常任委員会視察調査報告書

次のとおり、視察調査の結果を報告致します。

記

- 日時 ○ 令和7年7月29日(火)～30日(水)
- 調査都市及び調査内容 ○ 福岡県柳川市
・地域子育て支援拠点「このゆびとまれ」について
○ 一般社団法人家庭教育研究機構(福岡県飯塚市)
・フリースクール「みんなのおうち」について
- 調査結果の概要及び意見 ○ 別紙

※視察実施時に文教常任委員会副委員長の職にあった竹田匡志委員は、令和7年10月20日付で豊中市議会議員を辞職しました。

調査結果の概要及び意見

I. 福岡県柳川市 「地域子育て支援拠点「このゆびとまれ」について

(1) 視察の目的

全国的に不登校児童・生徒が増加傾向にある中、「子育てしやすさ NO. 1」を目指している豊中市において、学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、子どもたちが自ら進路を主体的に捉えて、社会的に自立することをめざし、多様な教育機会の確保に向けた支援を行っており、施策充実の参考にすることを目的とする。

(2) このゆびとまれの施設概要や取組内容等

1. 施設開設経緯

柳川市では、平成 19 年度から、親子がつどい交流することができる場、子育てに関する相談ができる場、地域の子育て関連情報を提供する場、子育て及び子育て支援に関する講習等の実施の場として、社会福祉協議会に事業を委託し、地域子育て支援拠点事業を市内の「柳城児童館」において実施してきたが、

「柳城児童館」は、建物の老朽化が著しく、手狭で駐車場も不足している状況だった。また、育児に関する負担感や不安、孤立感を感じる親が増え、子育て支援に対するニーズが多様化するなか、子育て親子同士が気軽に集い情報交換を行う交流の場や、相談しやすい体制を整える必要性がますます増している状況から、令和 4 年 4 月、市直営で「このゆびとまれ」を開設し、より充実したスタッフ体制のもと、来館者のニーズを捉え、工夫を凝らした事業内容で、多くの利用者が訪れる子育て支援拠点となっている。なお、施設の名称は、柳城児童館時代の愛称を引き継ぎ、「このゆびとまれ」とした。

建設地については、未活用地または施設整備配置の余裕のある私有地から選定したが、乳幼児健診等の母子保健事業の一部を実施している総合保健福祉センター「水の郷」の近くであり相乗効果が見込め、道路環境・交通アクセスが良いため、有明地域観光物産公園内への建設を決定した。

2. 施設概要

面積：11,151 平方メートル
建築面積：330 平方メートル程度
駐車台数：30 台
総事業費：約 1 億 5,700 万円（遊具等含む）

3. 運営スタッフ

- ・子育て支援コーディネーター 1 名
- ・子育てアドバイザー 7 名
- ・ファミリーサポートコーディネーター 2 名

4. 取組内容

- ・地域子育て支援拠点事業（子育て支援センター、このゆびとまれ）
主に、0歳から3歳を子育て中の親同士の出会いと交流の場であり、子育て中の親子の交流・情報共有・育児相談等を行い、育児の負担感や不安感を解消する事業である。様々な親子が過ごす日常の空間は、子育てや子育ての体験学習の場であり、見よう見まねで子育てを学ぶ第二の家庭のような場所となっている。子育ての相談や子育て情報を得たりもできる。また、さまざまなセミナーや相談会などを企画・実施している。保育所等の身近な場所で、利用者数は、令和6年度においては22,402人である。
- ・ファミリー・サポート・事業（子育て援助活動支援事業）
子育ての手助けをしてほしい人「依頼会員（おねがい会員）」と、子育ての手助けができる人「援助会員（まかせて会員）」との相互援助活動に関する連絡・調整を行う事業である。

利用料金（1人につき）

曜日	時間帯	1時間当たりの料金
月曜から土曜	7時～19時	200円
	上記以外の時間（19時～21時）	400円
日曜・祝日・年末年始・お盆		400円

(3) 各委員の所感

- 利用者の様子や成り立ち、経過などと柳川市の子育て支援の状況を詳しく説明され、実際に利用しておられる皆さんや子どもたちの様子を見せていただき、心の通った施設と利用者の様子を見学することができた。
- 当地は福岡県でも西南端に位置し、77.2平方キロに人口6万1千人が居住する都市である。施設の職員や利用者へのヒアリングも行ったが、過疎化が進む典型的な地方都市という感である。人口の出入が多いわけではないが子育て中の親の負担軽減・孤立感の解消を目的とした施設のニーズは高く、母子保健事業を行っている総合保健福祉センターも隣接し駐車場もあるため利用者が多いようである。当地以外にも拠点事業を3カ所で行っているがそれらは既存のこども園等で実施されており『地域性』が高いためかそれほど利用者が多いわけではない。豊中でも同じことが言えるのではないかと感じた。児童館的機能を求める声に対して既存のこども園等で対応するのは利用者目線ではハードルがあるのかもしれない。コストはかかるが誰もが使いやすい立地・施設での展開が好ましいかもしれないと感じた。

(別紙)

- 以前、社協に委託していた児童館を建て替え、このゆびとまれ設営にあたって市の直営で開館したことがとても印象的でした。施設で働く方々が、利用する親子さんたちからの相談や情報について市と共有しやすく、早く対応できると話されていたことも学びになりました。市が本気で子育て支援する際に、直接市民からの声を聞き、対応して施策に活かしていくためにも、直営で市民サービスを行なうことはとても重要だと改めて感じました。
- 施設内は明るく清潔で、子どもたちが安心して過ごせる環境が整っていた。親子が自由に過ごせるスペースのほか、個別相談コーナー、育児講座なども定期的開催されており、きめ細やかな支援体制が印象的であった。今回の視察を通じて、地域子育て支援拠点が、単なる遊び場としての機能にとどまらず、子育て家庭を地域社会につなげる“ハブ”としての役割を果たしていることが実感できた。
特に、「孤育て（孤立した子育て）」の解消に向けた取り組みは、現代の育児環境において極めて重要であり、育児不安やストレスを抱える保護者にとっての“安心の場”となっている点は大いに評価される。
- 旧児童館の老朽化を受けて開設された本拠点は、親子の交流・相談・情報提供・講習を一体化した子育て支援施設で、総合保健福祉センターに隣接し、母子保健との連携も図られている。市の直営化により信頼感が増し、各課との連携も強化。SNSによる情報発信や利用者主体のイベントも活発で、孤立防止の役割が大きく、子育ての自信回復や地域とのつながり形成への評価が高い。
- 柳川市の子育て支援施設「このゆびとまれ」は、市民が子育てを行うにあたり、出産から育児の悩みなどの不安をやわらげるため、市民に喜ばれる事業である。柳川市では、利用者のほとんどがマイカーで施設利用しており利用距離の問題点は解消出来るかもしれないが、豊中市に置き換えると距離と移動方法の違いで1箇所では満足いく事業とは言えない。子育て応援には何ヶ所が相応しいのか、投資額を考慮し優先順位を考える必要があると考えます。まずは豊中市で既存施設を利用して事業を行なった場合の満足度検証を行うべきと考えます。
- 当施設は子育て支援施設として、開設前には運営を民間委託していたが、リニューアル後はそのスタッフを市職員として雇用し、運営を委任している事例で、当事者からは、「運営側と市役所の意思疎通が住む巢になった」という述懐は興味深かった。また、施設の位置を市の中心部として、利用者の利便性を高める工夫も参考になった。
- 福岡県柳川市の子育て支援拠点施設「このゆびとまれ」を見学し、子ど

(別紙)

もだけでなく親をしっかり支える仕組みに感銘を受けました。自由に遊べるスペースや授乳室、砂場など子どもにとって安心できる環境が整っているだけでなく、助産師やスタッフによる相談機能や、同じ悩みを抱える親同士の交流の場があることで、孤立を防ぎ、子育てを前向きにできる仕掛けになっていました。親子で一緒に成長できるよう設計されている点は特に印象的で、豊中市においても参考になる部分が多いと感じました。子どもと親双方を支える場の大切さを改めて実感しました。

Ⅱ. 福岡県飯塚市 フリースクール「みんなのおうち」について

(1) 視察の目的

全国的に不登校児童・生徒が増加傾向にある中、「子育てしやすさ NO. 1」を目指している豊中市において、学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、子どもたちが自ら進路を主体的に捉えて、社会的に自立することをめざし、多様な教育機会の確保に向けた支援を行っており、施策充実の参考にすることを目的とする。

(2) みんなのおうちの施設概要や取組内容等

1. 施設開設経緯

2008年9月、「子どものまわりコーディネーターズくるくる」を発足し、相談事業を開始。2014年1月、「くらしサポートりびんぐ」に改称し、生活支援、通学支援を追加。2015年1月、一般社団法人家庭教育研究機構として法人化し、同年5月、学校法人西南学院の支援を受け、フリースクール「みんなのおうち」を開所した。2022年11月には筑穂中学校内「校内フリースクール」での活動の委嘱を受け、2025年4月に休眠預金等活用事業資金分配団体（構成団体）の採択を受け中間支援事業を開始した。

2. 施設概要

一般社団法人家庭教育研究機構が運営する小・中学生を対象とした福岡県飯塚市のフリースクールである。当該フリースクールの特徴は、昼食と送迎、学習は探求型学習を中心としていることである。運営体制として、理事3名、監事1名、調理スタッフ1名、事務会計1名、学習スタッフ3名、その他1名で運営している。なお、施設については、福岡市西南学院から賃借しており、建設費用はかかっていない。視察実施時点で12名の児童が利用しており、多いときは30名を受け入れているとのことである。

運営費用は、昨年度の福岡県からの補助が年間19万円で、それ以外にかかる費用は児童生徒の利用料が中心となっている。利用料については、週4回利用で35,000円、週3回利用で28,000円、週2回利用で21,000円、週1回利用で14,000円、年会費5,000円、入会時8,000円となっている。

3. 取組内容

フリースクール事業、訪問支援事業、相談・アドバイザー事業、中間支援事業などを行っている。また、地元の学校等との交流として、校長・教頭研修会講師や担当者研修会講師など、フリースクールを理解してもらう機会を行政が積極的に設けており、ケース会議や生徒支援委員会などにも参加している。それ以外でも、緊急の場合等は学校と連携を取り対応している。

フリースクール内での業務のうち、学習については、1週間ごとに自分で学習計画を立て、どの順番で取り組むかは児童生徒自身で決めている。体験活動については、家事、畑仕事、大工仕事など様々な活動を行っている。また、健

康づくり、表現活動、社会見学、遠足だけでなく、教育上の効果を期待されるボードゲームなどにも取り組んでいる。さらに、伝統行事、お誕生日会、学習発表会などを通して「共に生きる」ことを具体的に体験している。例えば施設内でのスマホの使用など、困りごとがあった場合は、多数決ではなく話し合っ

て解決するよう心掛けている。

(3) 各委員の所感

- 全国的に不登校が増加している中で、飯塚市立築穂中学内の不登校の対応と施設の様子を見学し、近隣に併設しているフリースクール(みんなのおうち)の見学、質問事項を答えていただきながら、取り組みの説明を聞く。豊中市の不登校対応学校の設置、建設の参考となり、児童生徒の対応について考えることができた。
- 当事業は(一社)家庭教育研究機構による不登校支援から始まったものであり、校内フリースクールと校外の施設で行うフリースクールが存在する。校内フリースクールはいわゆる『保健室登校』のような形態で、設置されている筑穂中学の生徒の居場所として専用スペース(元 PC 教室)が設けられており、ボランティアや手隙の教員によって生徒対応がなされている。引きこもろうとする生徒を学校にとどまらせる役割や不登校からの学校復帰に向けたステップになっている。

この事業を行うに当たって、人材・予算を確保するには相当な苦労があることも聞いており、豊中市の場合は校内スペースの確保も課題となると思われるが、学校に『行く』『行かない』という 100 か 0 かの選択肢ではなく、中間の選択肢を提供するものとして有意義であると感じた。
- 中学校内にフリースクールを設置し、教室までは行けなくても学校で学ぶ場所を生徒に保障している環境はとても新鮮でした。フリースクールの運営費用やスタッフの人員確保への課題も聞かせていただき、市として、子どもたちが通学をあきらめなくて良いように環境を整備していくためにも市内でも現場の声を聞かせていただき、連携しながら取り組む重要性を改めて感じました。
- 今回の視察を通じて、フリースクールの存在が不登校児童・生徒にとって大きな支えとなっていることを再認識した。公立中学校内で『校内フリースクールの運営』を実施されており、先進性を感じた。また、公的支援が行き届かない部分を補完するこうした民間の取り組みには、今後も積極的な支援と協力が求められる。行政としても、柔軟な制度設計や予算措置を通じて、こうした施設との連携を一層深める必要があると感じた。

また、「学びの場は学校だけではない」という価値観の浸透が、子どもたちの多様な成長の可能性を広げることにつながると実感した。

(別紙)

- 「みんなのおうち」では、学習・生活・訪問支援を通じて、子どもたちが自信を回復できる場を提供しており、保護者からは高い評価がある。一方で、年間 600 万～700 万円かかる運営費の多くは保護者負担に依存しており、財源確保が課題である。併せて、飯塚市では校内フリースクールも設置されており、教員や保護者のボランティアが支え、学校と家庭の中間的な居場所として機能。学校復帰も早く評価は高い。今後は教育委員会の予算での継続が検討されている。
- 筑穂中学校内に併設されており、普通教室に通う生徒と不登校生徒との自然な交流もあり、不登校生徒に良い影響がみられるとの説明が興味深かった。また、例えば他者とのふれあいが苦手な生徒には、パーティションで仕切られた専用スペースで自由に過ごせる配慮が興味深かった。
- 飯塚市のフリースクール「みんなのおうち」を訪れ、子どもと地域の関わり方について多くの学びを得た。不登校が孤立へとつながりやすかった従来の状況に対し、フリースクールという居場所があることで、子どもたちは早い段階で支えを受けられていると実感した。特に、子ども自身が計画やルールを話し合いながら決めていく経験は、将来社会で必要とされる自立性や協働性につながる点で大きな意義があると感じた。また、昼食にまで地域の温かさが込められており、教育と生活が一体となって支えられている様子に強い印象を受けた。こうした取組は豊中市においても参考になると考える。